

福島の実現

14.3.17

事故からまもなく3年の今年2月7日の、福島県の県民健康管理調査の検討委員会の発表
小児甲状腺がんは悪性と悪性疑い合計で74名。

この数字について、座長は「想定内のこと」と発言。

これをベラルーシと対比（なぜベラルーシか。1973年から全国のがん登録制度が整備
されていて、全ての悪性腫瘍の情報が網羅されているから）。

。しかし、チェルノブイリ事故から3年間で、ベラルーシで、小児甲状腺がんは合計11名
（2 + 4 + 5）。

表1 ベラルーシの甲状腺ガンの数¹

チェルノブイリ事故前			チェルノブイリ事故後		
年	大人	子供	年	大人	子供
1977	121	2	1986	162	2
1978	97	2	1987	202	4
1979	101	0	1988	207	5
1980	127	0	1989	226	7
1981	132	1	1990	289	29
1982	131	1	1991	340	59
1983	136	0	1992	416	66
1984	139	0	1993	512	79
1985	148	1	1994	553	82
合計	1131	7	合計	2907	333

事故から3年で、福島県はベラルーシの約7倍の数字です。

しかも、福島県の子どもの数はベラルーシの5分の1（1986年当時、ベラルーシの子
どもの人口は約180万と推定。他方、福島県の子どもの人口は36万人）。

人口比に直して対比すると、福島はベラルーシの35倍発症。

どうして、これが「想定内のこと」なのか説明が付きません。

急性白血病をカミングアウトした郡山市の高校生

日本の文部省は、昨年、学校給食でアレルギーによる死亡事故が1件起きただけで、直ちに全国の学校給食の見直しを指示。

しかし、文科省は急性白血病を患った福島県の高校生には何もしていません。
彼は福島県にある郡山高校の陸上部に所属する生徒で、今年の1月11日に自身のTwitterで急性白血病により緊急入院したことを明らかにしました。

子どもたちの間に、増大するブラブラ病

いま、福島の子どもの多くを「だるい、眠い、ふらふらする、風邪を引きやすい、風邪が治りにくい、体力が落ちた、学力が落ちた」といった奇妙な現象が襲っていると言われています。

これに対し、「最も悪いのは放射能を怖がる精神的ストレスだ」と一笑に付すのが国際原子力機関（IAEA）。

しかし、チェルノブイリでも同様の症状発生。原因は「心の持ちよう」ではなく、胸腺のホルモン量の大幅減少（免疫力の低下）、脳の器官的变化（慢性疲労症候群）、中枢神経系の損傷（めまい、睡魔）、血液や血管などの損傷・異常等で脳への血流が悪化（記憶喪失、集中力の喪失）が原因である可能性が指摘。これらの損傷をもたらした可能性の第一は――放射線による被ばく。

この現象は、今後、ガンや感染症、精神神経疾患、認識障害や身体的疾患になる「前ぶれ」を意味。子どもたちはイエローカードを発信している。レッドカードが出る前に、今ここで、抜本的な対策＝脱被ばく＝避難を真剣に考える必要があります。

Vol. 4 子どもたちのからだに危険！ ②「疲れた」が口癖の子どもたち

2013年12月2日発行

PEP UP 通信

※ 「疲れた～」が口癖の子どもたち

現代は、とてもストレスがたまるといわれています。子どもたちも例外ではありません。ある調査では、「からだのだるい」「頭がぼーっとする」「ねむい」といった『ねむけとだるさ』を強く感じる小学生が多くなっているそうです。また、朝の登校時に最も疲れを感じ、授業中にしだいに疲れがとれ、給食前がいちばん元気、という報告もあります。さらに曜日別の疲れ具合では、月曜日が最も疲れ、週末にむかって疲れが減少し金曜日がいちばん元気なようです。このような子どもの疲労感、生活の中でのストレスに起因するものだと考えられます。

※ 子どもの健康問題、第1位は生活習慣病！

山梨県内の約380校の学校医の方々を対象に行った調査の結果では、増加している子どもの健康問題の第1位は「生活習慣病」で「アレルギー疾患」を抜きました。また、生活習慣病にかかわる症状として、「肥満」が84.7%と突出しており、次いで「高脂血症」、「高血圧症」でした。子ども時代の生活習慣は、大人時代にも持ち越されるので、生活習慣の乱れは大人になってからの生活習慣病を発症するリスクを非常に高めると言えます。

学校医からみた最近増加している子どもの健康問題

